

## 歌川広重と木曾街道の旅

—大英博物館所蔵『スケッチ帖』の検討を基に—

菅原 真弓（京都造形芸術大学）

歌川広重（1797～1858）が制作した街道絵の代表的作例「木曾海道六拾九次」は、今もなお多くの解明されざる点を残す作品である。たとえばこの揃物は、合作ではないにもかかわらず、溪斎英泉（1790～1848）と広重の二人の絵師によって描かれている事が問題点といえる。またこの揃物には、三つの版元がその出版に携わっていることも知られる。そしてもう一つの問題は、描かれた風景が実景写生に拠るものなのか、という点である。

旅の情感あふれる名所絵を数多く残した広重には、ごく一般的に“旅する画家”のイメージがある。しかし実際はそうではなく、広重作品の多くが、たとえばいわゆる『名所図会』諸本などの地誌類の版本を参考に制作されていたことは、既に先学の諸氏によって指摘がなされている。また代表作「東海道五拾三次」についても、実景写生を基としているとした定説が、近年、改められるに至った。

しかし一方広重には、その筆になる旅の記録（旅日記やスケッチ帖）も現存する。現存あるいは存在したとする記録から判明する広重の旅の上限は、現在までの研究によれば、天保12年（1841）であり、これは甲州への旅であった。その折の旅日記（スケッチ帖）が残されており、その旅の様子が明らかになる。これに加えて旅の記録類からは、弘化元年（1844）には房総、翌2年には奥州安達、嘉永元年（1848）頃には中山道を上がって信濃、美濃、近江方面、さらに嘉永5年には再び上総、そして同6年には武蔵、相模を旅していることが明らかになる。現存する旅日記の類に描きとどめられた図柄を確認すると、錦絵として作品化されたと思しき素描もまま見られ、広重作品における写生の成果を見ることができる。

さて広重が木曾街道（中山道）を旅した記録は、大英博物館が所蔵する『スケッチ帖』四冊として現存する。但し現在までの研究では、この『スケッチ帖』の成立年代は嘉永元年頃とされており、本発表において取り上げる「木曾海道六拾九次」刊行よりも10年以上も後のこととなる。しかし『スケッチ帖』四冊は、肉筆画の小下絵としてある二冊と、旅のスケッチを描きとどめた二冊とでは趣が大きく違い、二つのグループに区分することができる。そして旅のスケッチを描きとどめた二冊とこの揃物を詳細に比較検討すると、風景表現（描かれた場）が一致することに加え、画中に描かれた人物など、その土地独特の風俗を写した何気ないモチーフが一致することが判明する。

本発表では、広重「木曾海道六拾九次」と、大英博物館に所蔵される『スケッチ帖』の比較検討を行う。そしてその結果として「木曾海道六拾九次」には実景写生によって成立した図が多数存在すること、また『スケッチ帖』じたいの成立年代の一部を改めることができること、したがって広重が実際に旅した時期をこれまでの研究よりも遡って設定することが可能であることを指摘する。